

5 戦略



重要課題

- 電動化の推進
- モビリティデバイドの解消
- モビリティ体験の質の向上
- 情報化・自動化技術の生活への活用
- ブランドマネジメントの強化
- 経営資源の有効活用
- 開発途上国の経済発展への貢献

5 戦略

▶ **Hondaのサステナビリティ** …… 13

持続的な成長のために …… 14

2030年ビジョン …… 15

マテリアリティマトリックス …… 16

サステナビリティマネジメント体制 17

ステークホルダーエンゲージメント 18

研究開発 …… 20

イノベーションマネジメント …… 21

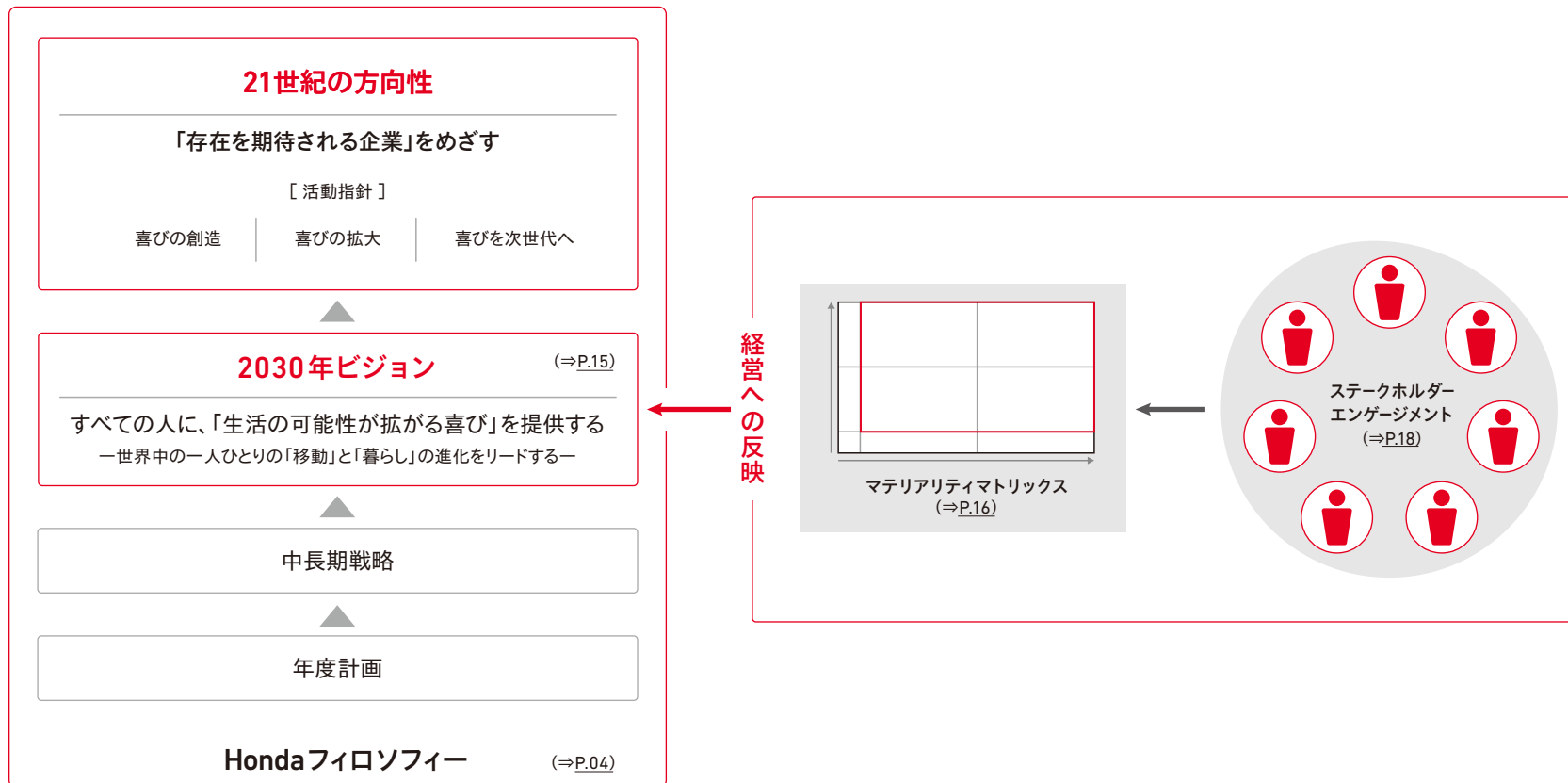
Honda のサステナビリティ

「Honda フィロソフィー」は、Honda グループすべての企業と、そこで働くすべての従業員の価値観として共有され、あらゆる企業活動と、従業員の行動や判断の基準となっています。

さらに、企業の成長機会の創出とサステナブルな社会の実現を両立させるため、21世紀の方向性として「存在を期待される企業」を掲げ、「喜びの創造」「喜びの拡大」「喜びを次世代へ」という取り組みを推進しています。

これらの実現に向けて、Honda が進むべき方向性を具体的に示したマイルストーン

が、「2030年ビジョン」です。Honda のサステナビリティにとって重要なことは、商品・サービスを通じた価値の提供によってステークホルダーの期待・要請に応えるとともに、環境や社会に対する影響への配慮など、企業の社会的責任を果たすことや、事業活動を通じて社会課題の解決に貢献することです。そこで Honda では、ステークホルダーと Honda の両視点を踏まえた課題の評価である「マテリアリティマトリックス」をガイドに、グローバルの地域ごとの特色に照らし合わせ、果たすべき役割や貢献すべき点を考慮した中長期の事業戦略を策定しています。



5 戦略

持続的な成長のために

Hondaのサステナビリティ …… 13

▶ **持続的な成長のために …… 14**

2030年ビジョン …… 15

マテリアリティマトリックス …… 16

サステナビリティマネジメント体制 17

ステークホルダーエンゲージメント 18

研究開発 …… 20

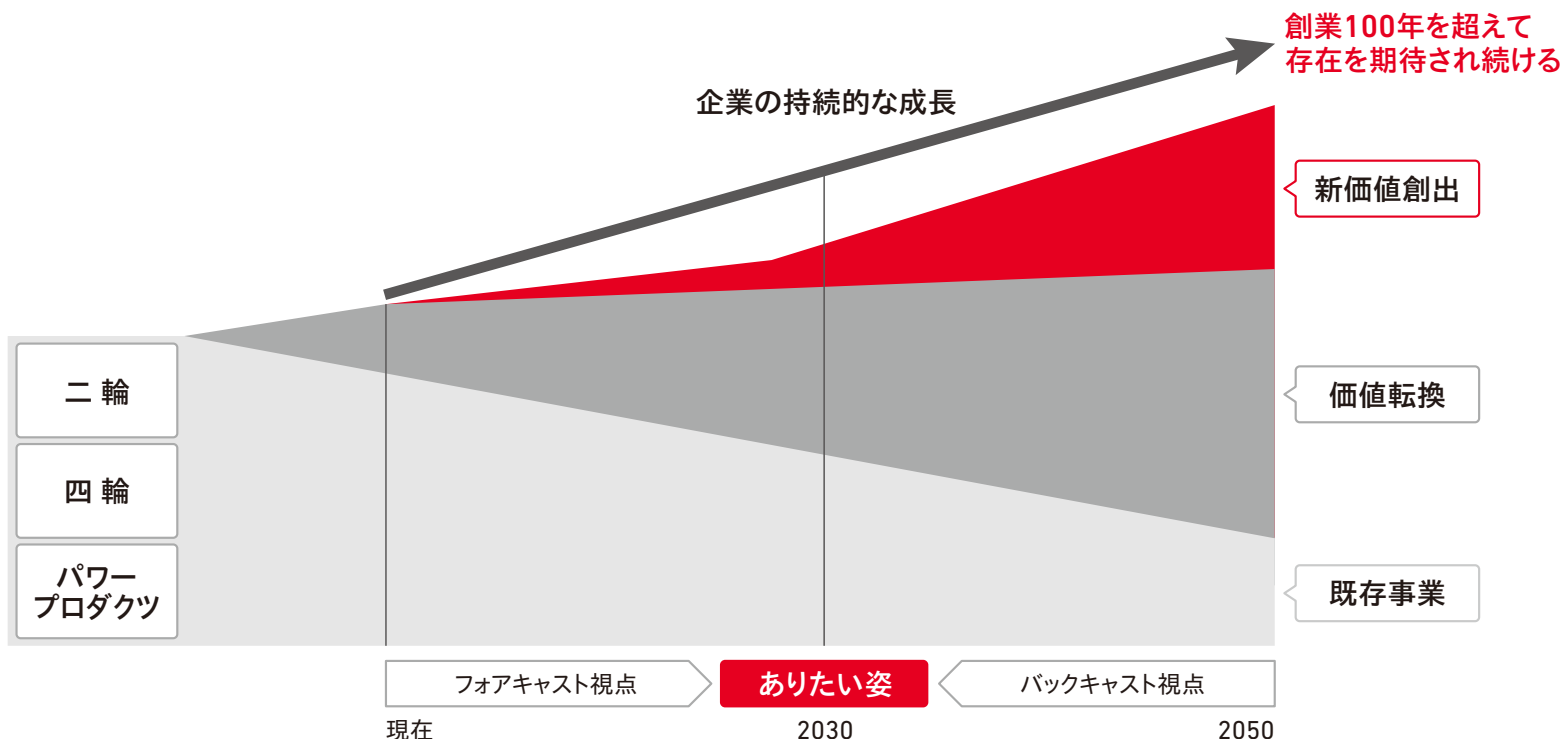
イノベーションマネジメント …… 21

貧困や難民問題、人権問題、気候変動、エネルギー問題、労働安全衛生の改善、高齢化社会など、多くの社会的課題が取りざたされています。そんななか、グローバルで多岐にわたるビジネスを行っている Honda にとって、バリュー・チェーンにおける機会や責任を理解することは、経営上の優先課題を特定するうえでも欠かせません。また、事業環境の急激な変化にいち早く対応し、乗り越えていくためには、次の方向性をビジョンとして定める必要があります。

Honda が、創業 100 年を超える 2050 年に「存在を期待される企業」であり続けるために、2030 年にありたい姿をまとめたのが「2030 年ビジョン」です。

持続的な成長のロードマップ

ビジョンの策定にあたっては、現在から将来を見据えた視点（フォアキャスト）と、2050 年から現在にさかのぼった視点（バックキャスト）、この両方の視点から長期の環境変化を検討しました。既存事業を継続的に運営していくなかで、大きく変化していく社会の期待とお客様のニーズに応じて、既存事業の価値をどう転換・進化していくのか。また、二輪・四輪・パワープロダクツ、そして、その枠を超えた新しい領域も含め、これまでなかった新たな価値をどのように創出していくのか。長期にわたって持続的な成長を実現し得るビジョンとするために、この「既存事業」「価値転換」「新価値創出」の 3 つの視点から、2030 年に向けた事業の変革の方向性を検討しました。



5 戦略

2030年ビジョン

Hondaのサステナビリティ	13
持続的な成長のために	14
▶ 2030年ビジョン	15
マテリアリティマトリックス	16
サステナビリティマネジメント体制	17
ステークホルダーエンゲージメント	18
研究開発	20
イノベーションマネジメント	21

Honda が策定した 2030 年ビジョンは、「すべての人に、『生活の可能性が広がる喜び』を提供する — 世界中の一人ひとりの『移動』と『暮らし』の進化をリードする —」というステートメントで表されるものです。このビジョンを達成するため、21 世紀の方向性の活動指針である「喜びの創造」「喜びの拡大」「喜びを次世代へ」の 3 つの視点で、取り組みの方向性を定めました。

まず、「喜びの創造」を実現するのが、『移動』と『暮らし』の価値創造です。「自由に楽しい移動の喜びの提供」と「生活が変わる・豊かになる喜びの提供」をめざして、「モビリティ」「ロボティクス」「エネルギー」の 3 つの分野に注力していきます。

次に、「喜びの拡大」を実現するのが、「多様な社会・個人への対応」です。先進国や開発途上国にかかわらず多様な社会に向けて、また、多様な文化・価値観を持つすべての人に向けて、最適な商品・サービスを提供することで、人々の喜びを、さらに

広げていくことをめざします。

最後に、「喜びを次世代へ」を実現するのが、「クリーンで安全・安心な社会へ」です。環境と安全の領域でのナンバーワンをめざして、さらに資源を投入し、カーボンフリー社会と、交通事故ゼロ社会の実現をリードする存在となることをめざしていきます。

また今回のビジョンでは、Honda 普遍的想いに立ち返り、「量」から「質」へと大きく舵をきりました。それが、我々の企業姿勢である「質の追求による成長」です。「提供価値の質」と「取り組みの質」を徹底して追求していくことで、喜びの輪を広げ、より輝く Honda ブランドをめざします。

このビジョンの実現に向けて、限られた経営資源を有効活用し、既存ビジネスの転換や進化、新価値創造を行っていきます。

2030年ビジョン

すべての人に、「生活の可能性が広がる喜び」を提供する

— 世界中の一人ひとりの「移動」と「暮らし」の進化をリードする —

質の追求による成長

《喜びの創造》
「移動」と「暮らし」の価値創造

- 自由に楽しい移動の喜びの提供
- 生活が変わる・豊かになる喜びの提供

《喜びの拡大》
多様な社会・個人への対応

- 社会特性や個人の状況に合わせた、最適な商品・サービスの提供

《喜びを次世代へ》
クリーンで安全・安心な社会へ

- カーボンフリー社会の実現をリード
- 交通事故ゼロ社会の実現をリード

注力すべき事業視点：経営資源の有効活用

5 戦略

Hondaのサステナビリティ …… 13

持続的な成長のために …… 14

2030年ビジョン …… 15

▶ **マテリアリティマトリックス …… 16**

サステナビリティマネジメント体制 17

ステークホルダーエンゲージメント 18

研究開発 …… 20

イノベーションマネジメント …… 21

マテリアリティマトリックス

ステークホルダーの視点を踏まえた課題の評価 (マテリアリティマトリックス)

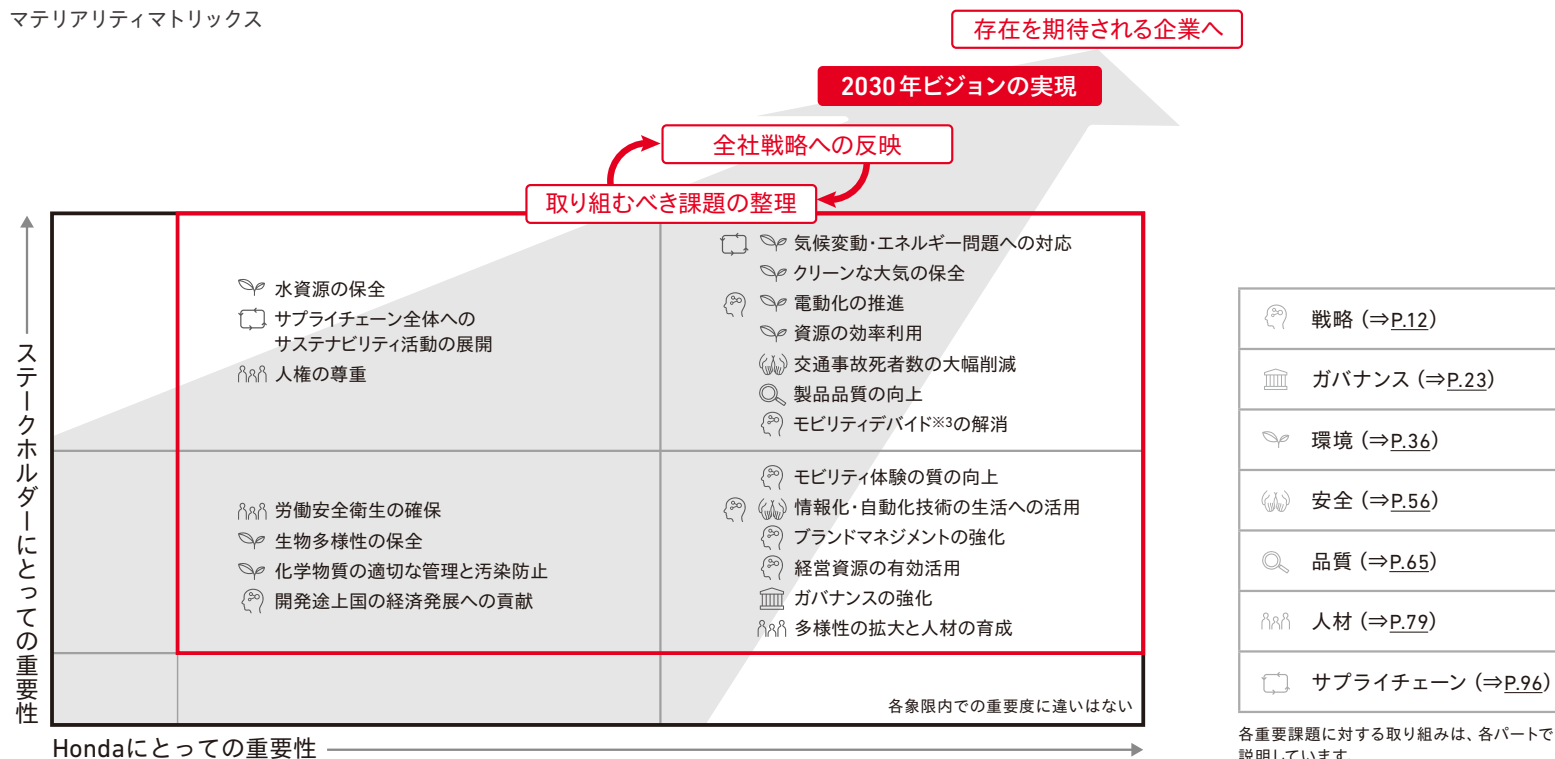
Honda フィロソフィーを基点とした長期ビジョン達成に向けては、取り組むべき重要な課題をHondaとステークホルダーの2つの視点から整理しています。「マテリアリティマトリックス」はそうした課題を整理するための代表的なフレームワークであり、これを作成・活用することで、課題の網羅性を確認し、位置付けを明確化しました。

マテリアリティマトリックスの作成にあたっては、課題の抽出とその重要性の評価という2段階で行いました。課題の抽出は、社内各本部のメンバーによる議論に加え、

技術革新の状況、SDGs※1やパリ協定に記された社会課題も踏まえ、グローバルかつバリュー・チェーンの観点で実施しています。そしてこれら課題の重要性のステークホルダー視点での評価は、代表的なESG※2評価機関や、企業のサステナビリティに精通した欧米のNGOとの対話などを通じて行いました。そのうえでサステナビリティ戦略会議などにおいて経営メンバーが評価、確認をしています。

こうして、「カーボンフリー社会の実現」や「交通事故ゼロ社会の実現」などを、モビリティカンパニーとして優先的に取り組むべき重要課題として可視化することができました。これらは、SDGs目標13「気候変動とその影響に立ち向かうため、緊急対策を取る」、目標7「すべての人々に手頃で信頼でき、持続可能かつ近代的なエネルギーへのアクセスを確保する」や目標3「あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を推進する」などの達成に貢献するものと考えています。このようにステークホルダーの視点を踏まえて特定された重要課題は、ビジョン達成のための全社戦略に反映され各事業活動へ織り込まれていきます。

マテリアリティマトリックス



※1 SDGs: Sustainable Development Goalsの略。2015年に国連持続可能な開発サミットにおいて採択された貧困や飢餓、エネルギー、気候変動、平和的社会などに関する国際目標。

※2 ESG: Environment (環境)、Social (社会)、Governance (ガバナンス)の略。

※3 モビリティデバイド: 移動手段の違いによる人の生活の格差。

5 戦略

Hondaのサステナビリティ …… 13

持続的な成長のために …… 14

2030年ビジョン …… 15

マテリアリティマトリックス …… 16

▶ **サステナビリティマネジメント体制 17**

ステークホルダーエンゲージメント 18

研究開発 …… 20

イノベーションマネジメント …… 21

サステナビリティマネジメント体制

サステナビリティ課題の特定と推進体制

Honda は、サステナビリティ活動の方針や取り組みを議論、検討する場として副社長 (COO) を議長とする「サステナビリティ戦略会議」を設定しています。

この会議では、全社長期ビジョン実現に向けた課題を、主要なステークホルダーとの対話などから認識した期待や要請に照らし合わせて特定し、その対応・推進の進捗状況の確認も含め、経営レベルで議論しています。

2017 年度からは、前年度まで別会議で詳細を議論していた環境安全領域も取り込んで、サステナビリティの課題をより統合的に一つの会議体で議論することとしました。

ここで検討された重要課題を踏まえて、経営会議や取締役会で全社戦略を決定し、各本部、各子会社の方針・施策として実行しています。

サステナビリティマネジメント体制 (2017 年度～)



5 戦略

ステークホルダーエンゲージメント

Hondaのサステナビリティ …… 13

持続的な成長のために …… 14

2030年ビジョン …… 15

マテリアリティマトリックス …… 16

サステナビリティマネジメント体制 17

▶ **ステークホルダーエンゲージメント 18**

研究開発 …… 20

イノベーションマネジメント …… 21

基本的な考え方

Honda が社会から「存在を期待される企業」となるためには、Honda がどのような価値を社会に提供しようとしているのかを適宜的確に伝えるとともに、多様なステークホルダーの Honda に対する要請や期待を把握・理解し、具体的な施策に落とし込み、その評価を受けるというコミュニケーション・サイクルを実践していくことが必要です。

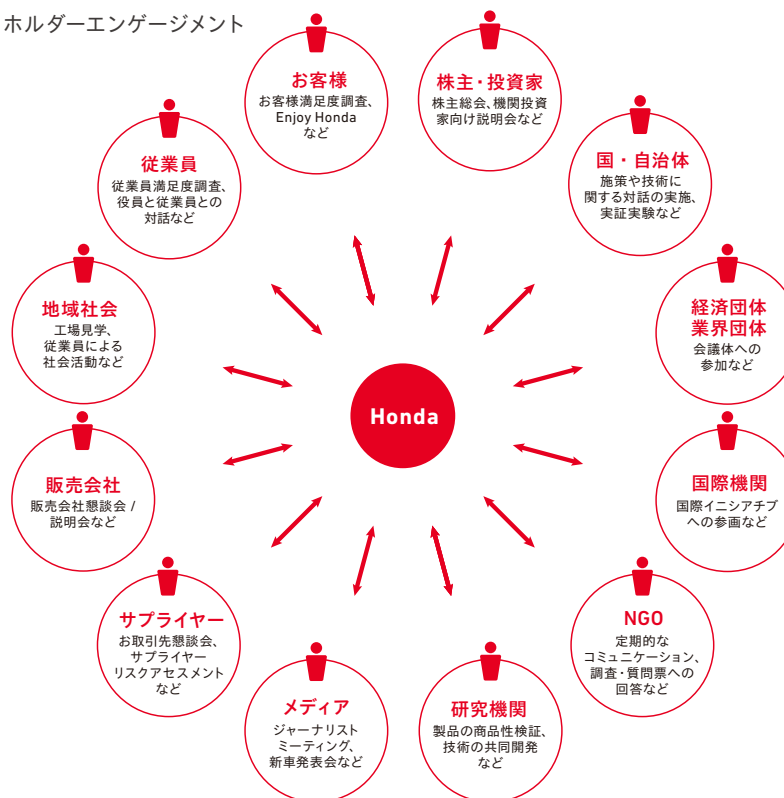
とりわけ近年は、事業の規模拡大やグローバル化に加え、ITの急速な普及によって、企業活動が社会に及ぼす、また社会が企業に及ぼす影響の大きさや範囲が広がっており、そのスピードも加速しているなか、「ステークホルダーとの対話」は、Honda の取り組みに対するより正しい理解につながるとともに、社会環境の変化やリスクを把

握できる有益な手段でもあると考えています。

こうした認識のもと、Honda は、事業全般に携わっていただくステークホルダーのなかで、Honda の事業活動により影響を受ける、もしくはその行動が事業活動に影響を与える下図の主要なステークホルダーと社内各部門がグローバルでさまざまな機会を通じて対話を実施しています。

また、代表的な ESG 評価機関や NGO との対話から得られた意見を「マテリアリティマトリックス」(⇒ P.16) に反映させ、Honda が取り組むべき課題の特定に役立てています。

ステークホルダーエンゲージメント



5 戦略

Hondaのサステナビリティ	13
持続的な成長のために	14
2030年ビジョン	15
マテリアリティマトリックス	16
サステナビリティマネジメント体制	17
▶ ステークホルダーエンゲージメント	18
研究開発	20
イノベーションマネジメント	21

ステークホルダーエンゲージメント

外部団体との協働

Honda は、グローバルなモビリティカンパニーとしての責任を果たしていくために、政府をはじめ経済団体や業界団体との対話を推進するとともに、外部団体との協働を行っています。日本においては一般社団法人日本自動車工業会の副会長職や委員会委員長職、委員、公益社団法人自動車技術会の会長職、東京商工会議所の副会頭職を引き受けています。

また、IMMA※¹やOICA※²といった二輪車、四輪車の国際団体においても、技術委員会などの議長を各業界団体の代表として務めています。さらに WEF※³や、WBCSD※⁴への加盟を通じて、サステナビリティに関するイニシアチブとも協力しています。

なお Honda の各地域における事業執行にあたっては、各地域が自立性を高め、迅速な意思決定を行うため、一定の範囲内で権限を委譲しています。政治献金を行う場合は、各国の法令に基づき、社内の必要な手続きを経て行っています。

外部評価

企業の持続可能性の指標 「Dow Jones Sustainability World Index」の構成銘柄に選定

2017年9月、Honda は社会的責任投資の代表的な指標であるDJSI※⁵の評価において、全世界における自動車セクターの上位5社に入り、「Dow Jones Sustainability World Index」の構成銘柄に初めて選定されました。また同時に、アジア・太平洋地域の「Dow Jones Sustainability Asia/Pacific Index」の構成銘柄に3年連続で選ばれています。

DJSI は、米国の S&P Dow Jones Indices 社とスイスの RobecoSAM 社によって運営されている投資指標で、経済・環境・社会の3つの側面から世界の主要上場企業のサステナビリティを評価し、総合的に優れた企業を構成銘柄として選定しています。

MEMBER OF
Dow Jones Sustainability Indices
 In Collaboration with RobecoSAM

RobecoSAM 社によるサステナビリティ評価にて 「Bronze Class」に3年連続選定

Honda はスイス RobecoSAM 社によるサステナビリティ企業評価「Sustainability Award 2018」において、「Automobiles」セクターの「Bronze Class」に3年連続で選定されました。RobecoSAM 社は、経済・環境・社会の側面から、世界約2,500の企業のサステナビリティ評価を行い、毎年、各セクターの評価上位企業を「Gold Class」「Silver Class」「Bronze Class」として発表しています。



「CDP Japan 500 Climate Change Report 2017」において 「A-」を獲得

2017年10月、CDP は、世界の大手企業約5,000社を対象に実施した、各企業の地球温暖化対策やGHG排出量削減への取り組みの調査結果を発表しました。

Honda は、そのなかの1カテゴリーである「CDP Japan 500 Climate Change Report 2017」にて、環境マネジメントにおいてベストプラクティスと認められる活動を行っているとして評価され、リーダーシップレベルのスコアである「A-」を獲得しました。

CDP は、企業や都市の重要な環境情報を測定、開示、管理し、共有するためのグローバルなシステムを提供する国際的な非営利団体であり、企業の環境問題への取り組みを「情報開示」「認識」「マネジメント」「リーダーシップ」の4段階で評価しています。

※1 IMMA : International Motorcycle Manufacturers Association (国際二輪車工業会) の略。

※2 OICA : Organisation Internationale des Constructeurs d'Automobiles (国際自動車工業連合会) の略。

※3 WEF : World Economic Forum (世界経済フォーラム) の略。

※4 WBCSD : World Business Council for Sustainable Development (持続可能な開発のための経済人会議) の略。

※5 DJSI : Dow Jones Sustainability Indices (ダウ・ジョーンズ・サステナビリティ・インデックス) の略。

5 戦略

研究開発

Hondaのサステナビリティ …… 13

持続的な成長のために …… 14

2030年ビジョン …… 15

マテリアリティマトリックス …… 16

サステナビリティマネジメント体制 17

ステークホルダーエンゲージメント 18

▶ 研究開発 …… 20

イノベーションマネジメント …… 21

独立組織で価値創造

Honda は、1960 年に研究開発部門を本田技研工業から分離・独立させ、株式会社本田技術研究所を設立しました。

創業者・本田宗一郎の「私が研究所で何を研究しているかといえば、技術ではなく、どういものが人に好かれるかを研究しているのです」という言葉が示すように、研究所の目的は技術を研究するだけではなく、人の価値観までも研究することです。人の価値観を研究することで、未知の世界の開拓を通じて新しい価値を創造することができるからです。

研究所には、「二輪」「四輪」「パワープロダクツ」という事業ごとに製品を研究開発する、それぞれの「R&D センター」があります。これらの R&D センターは、製品・市場特性に合わせた効率の良い商品開発を行うために、それぞれの地域に展開する体制を整えています。また、原材料や要素別の研究開発など、幅広く技術の自社開発を進めることで、技術に対する深い理解と、理解に基づいたユニークな発想による技術・製品を生み出してきました。R&D センター同士がお互いに研究成果を共有し、有効に活かしながら、地域との連携・調整を図ることで、現地に合わせた製品開発や、先端技術情報、市場情報の収集に努めています。さらに、昨今の技術革新、業界変化に呼応し、広く技術・ビジネスのパートナーと共同開発・協業を行うことを宣言し、強気に進めています。既存事業の発展はもちろん、それを超えたイノベーションを起こすこともめざしています。

これらのセンターとは別に、基礎技術研究センターでは、未来を洞察した多様な発想で研究が行われてきました。ここから、航空機、航空機エンジン、燃料電池自動車、水素製造ステーション、歩行アシストが製品化されています。また、同センターで開発された独自のロボティクス技術は、レース用二輪車の姿勢制御や、四輪車の自動運転研究にも活かされています。なお、同センターはさらなる新価値の創出に向けて、2017 年に R&D センター X に刷新されました(⇒ P.21)。

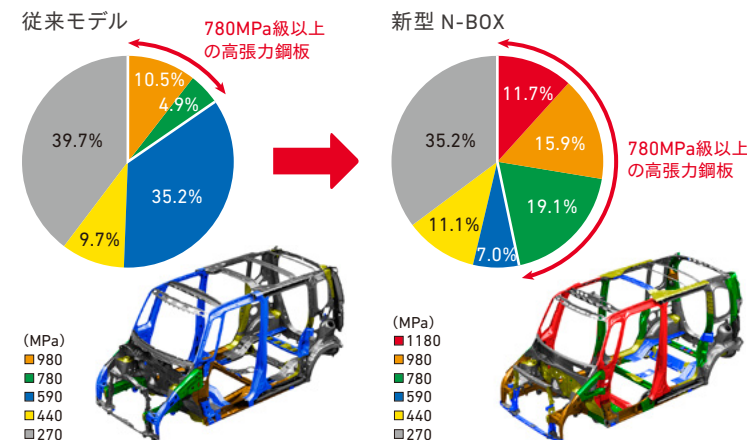
※1 高張力鋼板：鋼板の引っ張り強度が通常のものより高い鋼板。
 ※2 Honda 調べ(2017年8月時点)。
 ※3 センターピラー：前席と後席の間にある車体と屋根をつなげる柱状の部材。乗降時によく目に触れる、車体強度の要となる重要部品。

TOPICS

ボディーの基本骨格を材料・接合方法から見直して
大幅な軽量化を達成

Honda は、日本の軽自動車カテゴリ販売台数 3 年連続 1 位となる「N-BOX」のフルモデルチェンジにあたり、新設計のプラットフォームやパワートレインをはじめ約 9 割の構成部品を刷新し、安全装備を含む新たな装備を追加しながら、約 80kg の軽量化を達成しました。

最も軽量化に寄与したボディーは、厚さを減らしても強度を保てる高張力鋼板※1の適用を拡大。成形の難しさから、これまでは内部の補強部材として用いられてきた 1180MPa 級の高張力鋼板を世界で初めて※2センターピラー※3のおもて面に採用しました。また、自動車生産で一般的に用いられる点での溶接から線での溶接への変更や、高粘度な接着材を用いた面での接合など、新たな生産技術を効果的に導入してボディー全体の剛性をあげながら大幅な軽量化を達成しました。また、衝突時のエネルギーを吸収する構造を見直すことにより、衝突安全性能も両立させています。これらにより、室内空間の拡大、衝突安全性能、高剛性化、軽快で安心感の高い走りを実現しながら、優れた燃費性能を達成する基本骨格を完成させました。



5 戦略

イノベーションマネジメント

Hondaのサステナビリティ …… 13

持続的な成長のために …… 14

2030年ビジョン …… 15

マテリアリティマトリックス …… 16

サステナビリティマネジメント体制 17

ステークホルダーエンゲージメント 18

研究開発 …… 20

▶ イノベーションマネジメント …… 21

新領域の研究開発を加速

Honda は、2030 年ビジョン (⇒ P.15) において世界中の一人ひとりの「移動」と「暮らし」を進化させることをめざしています。それには、「二輪」「四輪」「パワープロダクト」「航空」といった既存の事業領域に加え、新たな領域の研究開発が必要です。近年の AI やビッグデータなどデジタルテクノロジーの進化にともない、これまで以上に幅広いフィールドにおいて、新しい価値創造の可能性が拡大しています。これを好機と捉えて、さらなる新領域における研究開発に注力しています。

さらに、その実現を加速するため、外部企業との戦略的な連携を図るオープンイノベーションを、積極的に推進していきます。変化の激しい現代においてクローズドな環境での開発では、変化のスピードに後れをとってしまうことは否めません。スピード感を持って対応するために、オープンイノベーションを取り入れるとともに、「AI × Data × Honda の強み」を活用して、これまでの「モノづくり」に加え、人と協調する新たな価値を持った「モノ・コトづくり」への取り組みを進めています。

「R&D センター X」を開設

Honda は新たなチャレンジに向けて、これまでとは異なるアプローチで新価値領域を担う研究開発組織「R&D センター X (エックス)」を、2017 年 4 月に開設しました。

R&D センター X は、2050 年を起点に「2030 年のありたい姿」を見通す視点で、長期戦略を視野に入れた研究開発を行います。研究領域の一つである「ロボティクス」には、単なる「ロボット技術」だけでなく、「モビリティシステム」など自律的に動く機械やそのシステム、これらを動かすための「エネルギー管理」も含めた、「人の素晴らしさが際立つロボティクス社会」の実現をめざした研究開発を行っています。R&D センター X では研究開発のコンセプトに、「3E (Empower, Experience, Empathy)」を掲げています。

2017 年 2 月には、R&D センター X の開設に先駆け、東京都港区赤坂に、オープンイノベーションを推進するための新拠点「Honda イノベーションラボ Tokyo」を開設しました。外部企業との戦略的な連携を図る場として、すでに多数の問い合わせをいただいております。将来の成果につながることを期待されています。

3E コンセプト



T O P I C S

「CES※ 2018」で、Honda のめざすロボティクス社会を提案

Honda は、2018 年 1 月に開催された「CES 2018」に、前年に続いて参加しました。3E コンセプトをテーマに出展し、Honda のめざす「人の素晴らしさが際立つロボティクス社会」を提案しました。会場では、3E を表現したロボットのコンセプトモデルをプレゼンテーションし、来場者の注目を集めました。



人とふれあってコミュニケーションをとる「3E-A18」



ラストワンマイルの移動をサポートする「3E-B18」



自ら学びながら、物販や移動広告などを行う「3E-C18」



路面状況の悪い場所で人の仕事をサポートする「3E-D18」

※ CES :「Consumer Electronics Show」の略。米国で開催される、コンシューマ・エレクトロニクス分野における世界最大の見本市。

5 戦略

イノベーションマネジメント

Hondaのサステナビリティ	13
持続的な成長のために	14
2030年ビジョン	15
マテリアリティマトリックス	16
サステナビリティマネジメント体制	17
ステークホルダーエンゲージメント	18
研究開発	20

▶ イノベーションマネジメント … 21

「ホンダ R&D イノベーションズ」の役割

Hondaでは2015年から、グローバルで優れた技術の発掘を行い、イノベーターとのオープンイノベーションを促進するプログラムである「Honda Xcelerator」を実施しています。このプログラムでは革新的なアイデアを持つスタートアップ企業に対し、コラボレーションの場、テスト用車両、Hondaのメンターによるサポートなどを提供しています。開発の対象領域は、エネルギー、ヒューマン・マシン・インターフェース（HMI）、パーソナルモビリティ、自動運転、AI、先進素材、ロボティクスなどで、モビリティやエネルギーマネジメントの進化をめざしています。

このHonda Xceleratorの推進役となるのが、米国シリコンバレーの「ホンダ R&D イノベーションズ」です。もともと同地には、主にコンピューターサイエンスをテーマとする研究拠点「ホンダ・リサーチ・インスティテュート」を2000年に開設しており、2005年からコーポレートベンチャーキャピタルを開始していました。また2011年にはホンダ R&D アメリカズ・インコーポレーテッドの「ホンダシリコンバレーラボ」に組織変更し、先行してオープンイノベーションに取り組んできました。そして2017年4月、従来の四輪車を念頭に置いた開発から発展し、新価値領域の研究開発を、よりグローバルに展開するため、新会社として独立しました。ホンダ R&D イノベーションズは現在を起点とした新技術の発掘・開発の役割を担っています。

ホンダ R&D イノベーションズでは、すでにさまざまなスタートアップ企業に対してHonda Xceleratorによる機会提供を行い、シリコンバレーで培った研究テーマに対する選択眼を活かしながら、スピード感を持って研究開発を進めています。そして将来の実用化に向けて、国内外のほかの研究所に引き継ぎを行っています。Honda Xceleratorは、かつてはシリコンバレー、ボストン、イスラエルを中心に行ってききましたが、現在ではデトロイト、欧州、中国、および日本も含めた連携を深めています。

また、クルマをプラットフォームと捉えて、スマートフォンやタブレット用のアプリを利用したサービスを、オープンイノベーションによって開発する「Honda Developer Studio」も提供しています。外部企業と提携し、新たな情報サービスや決済システム、キャラクターやゲームを取り入れたカーエンターテインメントなどの開発を進めています。

さらに最先端技術が集まるシリコンバレーならではの情報発信として、最新の技術動向をまとめたニュースレターを、世界中のHondaの技術者・研究者あてに定期的に配信しています。またHondaの全メンバーを対象に参加希望者を募り、最新の技術トレンドや開発中の技術を紹介する「Demo Day」を年に2回程度開催し、技術者・研究者のニーズを発掘するとともに、オープンイノベーションの文化をHonda全体に広めています。

これからもHondaはオープンイノベーションを積極的に推進し、グローバルレベルで新価値領域における研究開発に取り組んでいきます。

Honda Xcelerator のグローバル展開

